

[北総文化研究センターから]

北総文化研究センター主催「研究会」の経過報告(その15)

第70回研究会

1. 開催日 2015年6月19日(金)
2. 場所 1号館A205情報処理室
3. 題目 蛇口の水の向こう側
～四街道市と利根川・霞ヶ浦～

報告者 梶原 健嗣

本学正門の道路向かいに、四街道市の第1浄水場があることから、四街道市の水道問題を報告した。

テーマの1つは、「どこから水を得て、誰が浄水(水道水)を供給しているか?」と言う上水道のシステムの問題である。浄水の供給過程は、小売業に当たる水道事業と問屋・卸売りにあたる水道用水供給事業がある。

四街道市の場合は、本学正門前の第1浄水場が自己水源の地下水を用いた水道事業で、第2・3浄水場は水道用水供給事業から浄水供給を受けるもので、四街道市でも浄水配水のシステムは異なる。

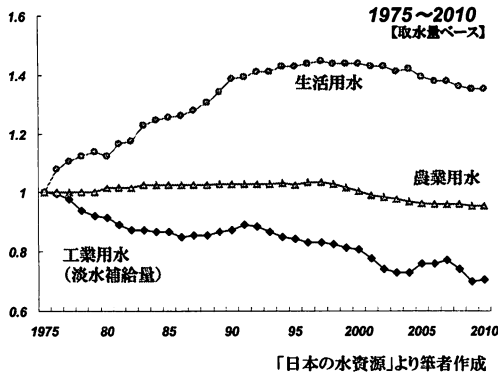
四街道市が加盟しているのは印旛広域水道で、利根川水系の水源開発による開発水から

の供給を受ける。もっとも完成したのは、群馬県の奈良俣ダムのみで、霞ヶ浦導水や八ッ場ダムは事業そのものが未完成である。

近年の水道事業をみると、新たな水源開発を必要とするような水需要の増大は見られなくなっており、実態にみあった計画への改定が望まれると思う。背景にあるのは節水機器の普及であり、こうした変化は構造的なものだと考えると報告した。

質疑は4つの質問を頂き、活発な討論をすることができた。第1は「農業用水や工業用水」の動向について。確かに高度成長期までは、絶対量の増大、地下水依存からの転換という2つの理由で工業用水需要は増加し続け、水源開発の中心だった。しかし、石油ショック後は、工業用水需要は落ち着いている。定例発表会では示せなかったが、図1のように、工業用水は低下の一途である。背景にあるのは回収水の増加、つまり工場内の水のリサイクル使用である。

もう1つ質問のあった農業用水需要では、上水道・工業用水と異なり、正確な統計が不備なため、はっきりとしたことはいえないのだが、もう少し合理化の余地はありそうだということを回答した。



【図1】用途別水需要の動向（1975年比）

第2は「ダムの必要性」について質問があった。ダムという河川構造物は水の流れを止めるだけではなく、土砂の流れをも止め、生態系の攪乱要因になる。ダム湖内にたまる土砂、堆砂を今後どうしていくかは、今後大きな課題になることは必至であって、その観点からも「可及的にダム建設は抑制すべき」と自分は考えている旨を返答した。

第3に地下水に依存する四街道市で地盤沈下のおそれはないか、質問があったが、この点は、当日十分なデータがなかった。

最後に、利根川河口堰などがウナギなどの遡上を妨げている可能性はないか、質問があった。この点は定説はいまだ確立されていないが、そうした因果関係を指摘する見解には十分説得力があることを回答した。

第71回研究会

1. 開催日 2015年7月17日（金）
2. 場所 1号館A204視聴覚室
3. 題目 物語の中の和歌の翻訳

報告者 伏見 親子

和歌の英訳について考察するにあたり、その結果の違いよりも過程を重視（Translation of *waka* vs. translating *waka*）し、翻訳という作業について、『源氏物語』の贈答歌の英訳を例に、以下の3点の報告を行った。

1. 『源氏物語』と、3つの英訳
2. 和歌と *tanka* (Japanese short verse of 5-7-5-7-7 syllables) の違い
3. 贈答歌の英訳に見られる手法の比較

1. 『源氏物語』は1008年に初めて記録『紫式部日記』にあらわれ、1010年前後に完成した。

英訳は、アーサー・ウェイリー訳（1925-33）、エドワード・G. サイデンスティッカー訳（1976）、ロイヤル・タイラー訳（2001）がある。ウェイリー訳からサイデンスティッカー訳まで約半世紀、更にタイラー訳まで四半世紀経っており、贈答歌の情報が読者に伝わる過程においては文化、時代、言語の壁があり、比較に際しては同じ言語への翻訳であってもこれらを総合的に考慮に入れる必要がある。

2. 英語圏にはローマ字の短歌 (*tanka*) となった和歌があるが、その *tanka* と和歌は以下の点で根本的に違う。

tanka : まず英語圏に haiku (5-7-5) という形で日本の定型詩が紹介され、その後7-7をつける形でtankaが紹介された。後ろの7-7でtoneが変わることが一般的に良いとされる。現代日本短歌と同様、日本古来の伝統的な約束事が含まれない。

和歌 : 和歌(贈答歌・唱和歌・歌合せ・独詠歌)は、日本古来の伝統的な約束事・決まり事に則って詠まれる。それらは、掛詞、同義語、縁語、引歌、歌枕や枕詞、民間伝承、迷信などである。

これら和歌の約束事・決まり事は、一種の暗号 (codes) であり、歌を詠み交わす人々と読者の間で瞬時に理解され、読み解かれる。鍵は、同文化・同時代・同言語 (原語) である。翻訳者の仕事は、原作と読者の間、つまり異文化・異時代・異言語の間にあつて、この暗号を解くことである。

3. 贈答歌は、歌物語の性格を持つ『源氏物語』では重要な場面の転換点・クライマックスで詠み交わされ、暗号を含んだ対話の役割をしている。婚姻、政治、儀礼、地位、あらゆる駆け引きに、相手の心情を探り、自分の立場を示すために、贈答歌は使われた。そこから物語は新たな展開を見せた。

翻訳は多かれ少なかれ物語の進行に影響を与えるものであるが、特に贈答歌においては上記のために顕著である。翻訳の過程では、掛詞の持つ両義性 (ambiguity) の表現方法、引歌を提示する方法、言葉の意味の重層性を示す方法、脚注のつけ方、等が翻訳者によってそれぞれ異なり、その結果、読者の物語の受け止め方が異なってくる。『源氏物語』の玉鬘に関わる物語から3組の贈答歌を取り上げ、和歌に乗せられた物語の構想 (plot) に

関わる情報を、3人の翻訳者がどのような方法で伝えていったかを検証した。贈答歌は大切な plot の転換点で交わされる暗号を含んだ対話であるがゆえに、そこに物語の翻訳の醍醐味が凝縮されている。

参加者からの質問とそれに対する回答

・ どうして1920年代にウェイリーが『源氏物語』を翻訳するようになったのか— ウェイリーは杜甫など唐詩を研究翻訳しており、そこから『源氏物語』に興味を抱いたらしい。

・ 和歌に含まれる全ての意味を翻訳で理解させるのは困難ではないか— 時代が進み日本文学が研究されるにつれ、翻訳者は別に引歌を書き出すなど脚注を充実させて対応している。

・ 『源氏物語』が世界に広く受け容れられたのはなぜか— 最初に光源氏の後日譚ともいえる「宇治十帖」が、現代人と変わらぬ人間の複雑な心理を描いている、として20世紀初頭の欧米の読者の注目を集めた。

・ 英詩に掛詞のような技法はあるのか— punning というものがあり、例えばシルヴィア・プラスは、“Tulips are too excitable.” といって、おそらくはルージュの濃い (しかもおしゃべりな) 唇 “two lips” と掛けた詩を書いている。

第72回研究会

1. 開催日 2015年12月18日（金）
2. 場 所 本学1号館304講義室
3. 題 目 万葉集第5巻独語訳（千葉県出身の藤代禎輔）再評価の視点－研究の背景、木村正辞と藤代禎輔の出会い他－

報告者 中島 正道

1. 研究の背景

平成25年（2013年）4月に本学に着任した私は、学部名称「人間文化学部」に魅かれるものがあつた。千葉県からは、どのような人物が生まれ、郷土のためにどのような貢献をしたのだろうか。郷土さらには国家のために働き、その人生の終わった後に、郷土の人々に語りつがれた人物について知ることは、この大学で教育の職にある者の義務のひとつだろう。

着任後、間もない6月に、本学の北総文化研究センターの町田武美所長からお勧めを受けて、「北総の哲人政治家西村茂樹の思想と生涯」について発表し、26・27年度に北総文化研究センターの研究目的の中に、「郷土の輝く人々」についての調査・研究を位置づけてきたのも、同じ義務感による。ただし、それを研究として実行するには深い検討が必要だ。授業や大学組織の管理運営と併行して何らかの成果をあげるのは容易なことではないのも確かだと言える。

西村茂樹研究については、幕末・明治期に日本の国家スケールで活躍した人物であるが、

近年、千葉県各層の人々の認知が薄くなってきていたのも事実だ。しかし、西村茂樹の開明的外交姿勢・社会道徳の乱れへの警告などへの日本知識層の注目は明らかだと思われる。私自身としても、西村茂樹の文部省編書課長（明治6年～）、編集局長（明治13年～）時代の業績について少しずつ調査・研究を進めている。

2. 木村正辞と藤代禎輔の出会い他

万葉集への私の関心は高校時代から続いているが、日本の読書人としてはごく普通のものとして推移してきた。また、「世界文学の中での日本文学」という視角は実に興味深いのが、多忙な大学教員としては、十分な読書経歴の中に入れるほどの実績はもちろん無い。キーンのこの視角からの作品は目に触れれば真面目に読むようにしてきた。キーンは万葉集について本格的には論じていないように感じていたが、書店で、ドナルド・キーン『日本文学史（古代・中世篇）』中公文庫（2013年刊）に出会った。本文400ページ弱のうち、「三、万葉集」は180ページ弱と比重は大きい。キーンは「万葉集の専門家ではない」と断りながら縦横に情熱的に日本文学研究者として論じている。早速購入して楽しく読んだ。

千葉県出身の万葉集研究者は、幕末・明治初期に木村正辞（きむら・まさこと、成田出身）の存在は極めて大きく「万葉学の巨匠」と呼ばれる存在であった。木村は晩年に東京帝国大学文科大学教授となり、その大学院での万葉集講義の最初の担当者であった。その講義を同大独文科大学院生（第一回生）として聴講したのが、同じく千葉県出身の藤代禎輔（ふじしろ・ていすけ）だった。

本誌（愛国学園大学『人間文化研究紀要』

第18号)に「藤代禎輔の業績再評価について(結)」と題する小生の投稿を掲載して頂いているので、藤代禎輔『独訳万葉集第五巻鈔』へ興味を持たれる方にはご覧頂きたい。

(質疑応答) 1. 第5巻独訳対象30%は妥当か。A1. 妥当と思う。2. 全20巻の残19巻の独訳稿は現存か。A2. 現存を希望する。